

本能寺蔵『落葉百韻』 訳注 (三) 付 『落葉百韻』 調査記録

伊藤伸江・奥田勲

本稿は、本能寺のご好意により閲覧させていただくことのできた『落葉百韻』の調査記録と、「『落葉百韻』訳注(三)」よりなる。調査は、法華宗研究者の中尾堯氏の参加を得て、伊藤と奥田、中尾氏によりなし、注釈は『落葉百韻』訳注(一)、「『落葉百韻』訳注(二)」と同じく伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめている。なお、この研究は、科研費基盤研究C「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」(研究代表者伊藤、研究分担者奥田)により行なっているものである。

本能寺蔵『落葉百韻』 調査記録

【調査日時】 平成二十二年五月三十一日

【調査場所】 本能寺宝物館「大寶殿」三階第二会議室

【調査者】 中尾堯・伊藤伸江・奥田勲

【調査書誌】

本調査の対象である『落葉百韻』は、古写、卷子本一軸。軸は朱頂黒漆の合わせ軸、軸長二〇・一センチ。八双は竹、紐は根元から取れて存しない。

表紙は、幅二十一・五cm、天地十八・一cm。いたみが激しく、一部裂け、切れかかっている。題簽はなく、金銀貼りちらしの装丁をほどこされていたが、銀は焼け、剥落している。表紙左中央下に「大本山本能寺什寶」（昭和十五年八月三十日付）のラベル、中央下に「本能寺文書 寅 11」と書かれた新ラベルが貼られている。この新ラベルの貼付年月日は不明であるが、『本能寺史料』（平成四年）の編纂発行のためになされた、藤井学・波多野郁夫両氏を代表とする調査団による調査の際に貼られたものであり、現在はこのラベルの表示番号により整理され管理をされている由である。

表紙左上「一条太閤代」の字が見えるが、それ以外は文字は読み取れない。

見返しも、表紙同様いたみ、金銀貼りちらしの装丁をほどこされていたが、銀は焼け、剥落している。右上に二行文字が見えるが、読解しえない。

中央下部に、はつきりと花押が残る。柔らかい筆であり、公家、法華僧など有力者の花押かと思われるが、不明。袖判であろう。

本紙は、連歌の百韻が書かれた楮紙に裏打ちをほどこした計八紙を貼り、卷子に仕立てている。以下寸法を記す（のりしろは除外する）。

第一紙	紙長	五〇・二cm	天地	十八・一cm
第二紙	紙長	五〇・八cm	天地	十八・一cm
第三紙	紙長	五一・八cm	天地	十八・一cm
第四紙	紙長	五一・九cm	天地	十八・一cm

第五紙	紙長	五一・七 cm	天地	十八・一 cm
第六紙	紙長	五一・四 cm	天地	十八・一 cm
第七紙	紙長	五一・八 cm	天地	十八・一 cm
第八紙	紙長	五一・二 cm	天地	十八・一 cm

各紙裏の継ぎ目部分には、両紙にまたがるように印が押してあり、その印が第二紙と第三紙、第三紙と第四紙の継ぎ目でずれている。すなわち、

第二紙と第三紙の継ぎ目

第二紙 印高 下から一・九 cm

第三紙 印高 下から三・二 cm

第三紙と第四紙の継ぎ目

第三紙 印高 下から三・三 cm

第四紙 印高 下から一・九 cm

である。表装以後のある時点で第三紙が剥落し、補修の際には、落葉百韻懐紙の複製をもう一組以上同時に用意しており、同時進行で製作していた際に別製本用の第三紙がまぎれこんでしまったものであろうか。更に、内容をも念頭に入れれば、第三紙と第四紙は順序が逆に貼り込まれており、百韻の句は第一、二、四、三、五、六、七、八紙の順に並べるのが正しい。

懐紙は表紙、見返しと比較してかなり新しい。懐紙を継いで本文部分を作成する際、表紙は既に存した古代のものを用的のであろう。懐紙の裏の汚れ具合に相違があり、第一紙が特に汚れ、他はさほどでもないことから、第一紙の裏を表面に重ね置かれていた時期があったものか。

書写された内容は、汚れもなく、連歌懐紙の形式としても整っており、美麗に写されている。が、第一紙、端作は「十月廿五日」のみであり、年次がない。第一紙は他の紙よりもわずかに短い、これ以上の記載はなく、書写の段階で既に欠けた状態の親本を写したものと思われる。第六紙に一句分の空白があるのも、同様に親本の段階の欠落である。第三、四紙が錯簡であるのは前述の通り。第八紙、句上に付随した注記は、句上と同筆か。句上の後ろに一行、小字にて書き込みがあるが、真ん中よりやや下に「や」が見える以外は読み取れない。本文とは筆跡が違い、すり消した跡が見られるものである。

箱は桐製で、形状はかぶせ蓋、縦二十一・七センチ、横六・六センチ。箱高五・八センチ。箱表中央上部に、打ち付け書にて「一條太閤御発句之懐紙」下部右よりに「日嘉師寄進」下部左よりに、本能寺の所蔵を示すラベルが貼られ、さらに下部に「住」の文字が書かれている。ラベルに隠れて見えないが、「(本能寺常)住」と書かれていたのであろう。所蔵ラベルは、卷子本の表紙同様、昭和十五年八月三十日付の「大本山本能寺什寶」と書かれたものと、日時不明の新ラベル「本能寺史料」が貼られている。

本能寺蔵『落葉百韻』訳注(三)

凡例

一、底本は本能寺蔵某年十月二十五日賦何人百韻(『落葉百韻』)である。該本は他に写本の存在を聞かない孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、

校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、【式目】【作者】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

(二折 表 一一) なきが形見の竹のひとむら

三三三 朝顔はあしたのほどや開(works)にけん 三位

【式目】秋(朝顔) 参考「朝風、朝霜などの朝字懐紙替て四」(新式追加条々又追加)。この百韻は三折裏に「朝け」、名残折に「朝川」がある。

【作者】三位(半井明茂)

【語釈】●朝顔 ヒルガオ科の一年生つる草であり、平安初期に中国より渡来した。早朝に花開き、昼にしほむゆえに、はかないものの象徴とされた。「色かへぬ竹のまがきの朝顔もおのれはあだの花にぞありける」(土御門院御集・槿花・五八)。ここの付合では「なき」(人)という言葉が前句にあり、同じ句内に「あした」があることから、人のイメージも揺曳するように思われる。「朝有紅顔誇世路 暮為白骨朽郊原」(和漢朗詠集・無常・七九四・義孝少将)●あした

のほどや 朝のうちなのか。「風もあとなきみねのむらくも／すずしさもあしたのほどと山こえて」(基佐集(静嘉堂文庫本)・三〇五／三〇六)。「昼トアラバ、朝がほのしほる、」(連珠合璧集)。●開にけん 咲いたのだろう。万葉集に見られる表現だが、和歌、連歌には少なく、古代的な表現。「高田の野辺の秋萩このころの暁露に咲きにけむかも」(万葉集・卷八・一六〇五・大伴家持)。

【付合】前句「竹」は緑色を変えぬことから、末長さの象徴とめでられる。「色かへぬ松と竹とのすゑの世をいづれひさしと君のみぞ見む」(拾遺集・賀・齋宮内侍・二七五)。前句の、後まで残る「竹」の様を、はかなく枯れた「朝顔」の後に残るとみなした。「竹」はまた「たけ(闌け)」、例えば「おもへば千代も一時の夢／秋は早竹に朝顔咲か、り」(初瀬千句第六百韻・九四／九五・梁心／宰相)で、竹に秋が深まったことを掛けるように、ここも日がのほりきつた様を竹と掛けている。「竹」は籬と関係が深い語であり(籬トアラバ、竹)(連珠合璧集)、そこから籬に這う朝顔を連想する場合も多い。「人の世もへだてはあらし今日の日もたけの籬のあさがほの花」(逍遊集・朝観無常・二六五四)。

【一句立】朝顔は、朝のうちには咲いていたのだろうか。今はもうしぼんでいることよ。

【現代語訳】(前句 あのひとつむらの竹は亡き人の形見だ。) 人の命同様にはかなくしぼむ朝顔は、朝のうちは咲いていたのだろうか。日もたけた今はもうしぼんでいる。

(二折 表 一二) 朝顔はあしたのほどや開にけん(開)

三四 うつろひやすき秋の日の色 円秀

【式目】 秋

【作者】 円秀

【語釈】 ●うつろひやすき 変わりやすい。ここは前句の朝顔のしほみややすさと、秋の日差しの変化しやすさを掛けて

言う。「月草の色にさけばや朝顔のうつろひやすき花とみゆらん」(草庵集・六〇五)。「紐とくほども中の衣／＼／しの、めの花の朝顔うつろひて」(竹林抄・秋・三四五・専頌)。

●秋の日の色 秋の日の光の様子。元来漢詩文に「日色」という表現があり、新古今時代、和歌にも「日の色」として詠まれるようになり、後に京極派和歌で、一日のうちの光の様子の變化に着目した歌に使用される。ついで正徹がこの表現を使い、夕暮れになっていく光のさまを詠んでいるのは注目されよう。連歌においては十六世紀に数多く出現するが、「秋の日の色」は、この句以外は管見に入らない。「神無月暮れやすき日の色なれば霜の下葉に風もたまらず」(続拾遺集・冬・四〇五・藤原定家)。「朝まだき草に影さす日の色のすさまじきにも秋ぞ暮れぬる」(歌合(正安元年)嘉元元年)・秋朝・四・中将(永福門院)。「すゞしくもゆふづけて行秋の日の色ぞ梢のうすきもみぢば」(草根集・初秋日・七六三五)。「かきよするつまでゆふ繩ときほして／日の色さびし村の片岡」(伊庭千句第八百韻・一三／一四・宗長／宗頌)。心敬は「秋の日の影よりよわき老が身や昨日の露の朝顔の花」(心敬集・応仁二年百首・懷旧・二六八)と、老身の弱々しさを秋の弱い日ざしと朝顔とにたとえており、この句の進行の理解に益する。

【付合】朝顔の花の枯れやすさと、夕暮れになるのが速く、日差しが早々と弱まっていく秋の日の光のさまとを「うつろひやすき」で結んだ。

【一句立】すぐに弱々しくなっていく秋の日ざしのさまよ。

【現代語訳】前句 朝顔は朝のうちは咲いていたのだろうか。今はもう花を閉じてしまって、盛をすぎていることよ。(それと同じように、秋の日差しも早くも、薄々と弱々しくなっていく。)

(二折 表 一三) うつろひやすき秋の日の色

三五 干しかぬる衣はいかで打ちてまし

毘親

【式目】 秋（衣、うちて） 衣（衣裳） 衣与衣（可隔七句物）

【作者】 毘親

【語釈】 ●干しかぬる 乾かすことができないでいる。「干しかぬし袂ははやくくちはてて恋ぞ涙にあらはれにける」（六百番歌合・顕恋・七二三・藤原兼宗）。●打ちてまし 打とうかしら。「秋の末の心、きぬた衣打」（連珠合璧集）。

【付合】 すぐに消えそうになってしまふ秋の日ゆえにぬれた衣が乾かないととりなした。前句には「うつろふ」「秋（飽き）」と恋の風情も汲むことができ、涙に濡れて乾かないイメージも感じうる。三三から三五、三六まで、朝から夕方、夜、夜明けへと時もうつる。

【一句立】 乾かきれない衣はどうやって槌で打つたらよいかしら。

【現代語訳】（前句 変わりやすく、すぐに弱くなってしまふ秋の日差し。）そんなふうだから干しておいても衣が乾かせない。昼の間に乾かきれない衣は、夜にどうやって打つたらよいのだろう。

（二折 表 一四） 干しかぬる衣はいかで打ちてまし

三六 露もりあかす草の仮庵

正頼

【式目】 秋（露） 仮庵（庵は居所・用） 露（降物）

【作者】 正頼

【他出文献】 「露もりあかす草のかりいほ／いにしへを忘れぬ山のよるの雨」（心玉集・一五五八／一五五九）。

【語釈】 ●露もり 露が洩れ落ち。露がしたたり落ちること。「秋にもあかぬあまの橋だて／松の葉もしたに色付露もりて」（寛正四年六月廿三日唐何百韻・七八／七九・心敬／専順）。●もりあかす 庵をまもり夜を明かすこと。この「もり」は、「露」の語から「洩り」と「守り」の掛詞。「小山田のかりほの廬の秋の露むすぶよりこそもりあかしけれ」

(為家集下・秋田・一八三八)。従来和歌では「秋の田にいほさすしづのとまをあらみ月と友にやもりあかすらん」(新古今集・秋上・四三一・藤原顕輔)のように「洩る」のは月の光が主であり、露を「洩る」とするのは珍しい。正頼には次のような月の光と雫が「洩る」句があり、三六句に発想が近い。「月ながら木のまを森の雫哉」(小鴨千句追加・発句・正頼)。**●飯庵** 飯につくった庵。「草の飯庵」は草で葺いた飯庵。「草の庵」よりもさらに急ごしらえのため、月の光や露、雨滴が洩れ入る。「袖ぬらすしの葉草のかりいほに露のやどとふ秋の夜の月」(新千載集・秋上・題しらず・四二五・後西園寺入道前太政大臣)。「夕ぐれの秋のおもひぞかさなれる落葉が下の草のかり庵」(草根集・幽居秋夕・九〇八二・康正元年九月十三日詠)。「かきたえばたゞ身ひとつの思ひかは／雪にかたぶく草のかりいほ」(吾妻辺云捨・冬・四七五／四七六)。

【付合】前句の「干しかぬる」、即ち衣が乾かせない原因を、粗末な作りの飯庵なので「夜露が洩れ落ちてくるから」とした。また、「露」から恋の涙のイメージも前句同様に感じうる。

【一句立】一晩中、露がこぼれ落ちるそんなすきまだらけの草葺きの飯庵で、夜をあかすことよ。

【現代語訳】(前句 乾かしきれない衣はどうやって槌で打つたらよいのだろう。)一晩中露が洩れたたつてきて衣が濡れてしまう、そんなすきまだらけの草の飯庵で、夜を明かすのだ、

(二折 裏 一) 露もりあかす草の飯庵

三七 いにしへを忘れぬ山の夜の雨 心敬

【式目】雑 夜分(夜) 雨(降物) 古(一座一物)

【作者】心敬

【語釈】●いにしへを忘れぬ 昔を忘れない。藤原俊成歌「昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山時鳥」(新古今集・

夏・二〇二)を本歌とし、参考歌に「五月雨におもひこそやれいにしへの草の庵の夜半のさびしさ」(千載集・夏・題しらず・一七七・延久三親王輔仁)が挙げられる。俊成歌が、白居易の詩句(↓次項(●山)参照)を取り、華やかであつたわが身の過去を振り返る形で「昔思ふ」と詠じたことから、この「いにしへ」は、盛りの頃の自らの様ととらえる見方が一つ成立する。また、参考歌の輔仁親王歌も白居易の詩句に想を得て詠まれており、「いにしへ」を、昔、草庵に隠棲した白居易の不遇な境遇の寂しさにとらえ、同様に不遇な自分ゆえに共感を持って思い浮かべているとする見方もできよう。↓【考察】●山 この句は、「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中」(和漢朗詠集・雜・山家・白居易、原典は『白氏文集』卷十七「廬山草堂、夜雨独宿、寄生二・李七・庾三十二員外」)を明らかに意識しており、「山」には白居易が隠棲した廬山のイメージを重ねうる。また、『枕草子』「山は」には「忘れずの山」がある。●夜の雨 「夜雨」は、人の心に深い感情をもたらすもの。正徹歌「くらき夜の窓うつ雨にわが心しづめばうかぶ世、の古事」(草根集・卷六・窓雨・五〇八六)。「夜の雨の心のそこにとをる哉ふりにし人や袖ぬらすらん」(草根集・卷六・夜雨・五二一五)など。後者は『東野州聞書』でとりあげられ「まことに深心ありて、よまれたるけしき見ゆ」と推察されている。心敬歌では「しれかしな窓うつ秋の夜の雨夕の桐の葉の落つる時」(権大僧都心敬集・寄桐恋・三三〇)がある。

【付合】【語釈】に挙げた俊成の歌を踏まえ、「草の仮庵」に「夜の雨」を付けた。「草の庵に、〳時鳥を付、昔おもふ草の庵のよるの雨に涙なそへそ山ほと、ぎす(新古、夏、俊成) 夜雨付(も) 此歌也。又は、廬山雨夜草庵中」(連歌寄合)。また、前句の「露」に涙の露を重ねることも可能である。「露トアラバ、涙」(連珠合璧集)。

【一句立】隠棲していても、昔の我身の栄華を忘れることもできないでいる、そんな山住みの雨の夜。

【現代語訳】(前句 夜通し露も涙も洩れ落ちる、粗末な草庵の一夜であることよ。)昔を忘れることもできず、物思いに沈んで聞く、山住みの夜の雨の音。

【考察】草の庵で夜の雨の音を聞く様について、心敬の説を引いていると思われる『新古今集聞書(常縁原撰本)』では、前掲俊成歌の注釈は「我都に住る時は草庵などはうき事のやうに聞思ひしに、世をのがれてこの草の庵りにすみて

夜もすがら雨の音をきくに、心も一しほすみまさりて感情おほし。かゝる面白事の草庵などにあらんとはしらざりし事と思ふおりふしゝ古人はいづれも夜るの雨をおもしろき事にいひ侍り」と表現されている。心敬所与本によると推測されている『新古今拔書抄』もこの俊成歌を「此哥感情ふかし。くたゞ老後に草庵のよるの雨をきゝて、至極断腸する上に、又郭公一声鳴て弥昔のこひしさをもよほすと也。(後略)」と見ている。

(二折 裏 二) いにしへを忘れぬ山の夜の雨

三八 松吹く風も霞みはてけり 立承

【式目】春(霞み) 松(植物) 風(吹物) 霞み(聳物) 松風(二座二句物)

【作者】立承

【語釈】●松吹く風 松を吹く風。「小塩山知らぬ神代はとほけれど松ふく風に昔をぞさく」(新後撰集・神祇・七三四・前左兵衛督教定) ●霞みはてけり すっかり霞んでしまったよ。「松吹く風」までもが霞がかかったように見える、深い霞の様。元来風が静まることで、あたりが霞んでいく光景を詠むことが多く、風に焦点をあてて、霞むと表現するのは珍しい。この表現で、風がのどかであることをも示唆し、春らしくした。「霞トアラバ、風」(連珠合璧集)。

【付合】夜の雨の情景から、朝に松を吹く風を出し、霞によって新たに春の境地を呼び入れ、歌境の転換をはかった。また、松は長寿を意味し、昔を思わせる素材であり、前句の「いにしへ」に縁を持つ。

【一句立】松を吹く風までもすっかり霞んでしまったことよ。

【現代語訳】(前句 山住みのこの身は、夜、聞こえる雨の音に、昔の事を忘れられずに思い返してしまうことだ。)そんな物思いを誘う夜の雨も止み、今朝は、松を吹く風までも、霞を通して吹いてくるので、すっかりのどかに霞んでしまったことよ。

(二折 裏 三) 松吹く風も霞みはてけり

三九 散花のほひを春のなごりにて 日明

【式目】春(花・春のなごり) 花三 懷紙をかふべし、にせ物の花此外に一(一座三句物) 名残只一花などに一(一座二句物)

【作者】日明

【語釈】●散花のほひ 散っていく花の持つ、心にしみるような美しさ。この場合の「にほひ」は、落花がかもし出し、人の心に強く訴えかける美の総合的な表現であると考えられる。「ふりはへていざふるさとの花見むと来しをにほひぞうつろひにける」(古今集・四四一・よみ人しらず)、「明日も来ん今日も日暮らし見つれどもあかぬは花のほひなりけり」(玉葉集・一六一・大宮前太政大臣)などの例がある。「花トアラバ、くちる・うつろふ・さかり・身・心など皆花によせある詞也。」(連珠合璧集)。●春のなごり 春の終わりを感じさせ、惜春の情を催させる光景。「くれてゆく春のなごりをとめじとやちりしく花をさそふ山かせ」(延文百首・二二〇・藤原実明女)。

【付合】前句の「霞」に「春」「花」と関係の深い語句で句を続けた。

【一句立】散りゆく花の美しさを、春を惜しむなごりの光景としてめでて。

【現代語訳】(変わらぬ松を吹く風もすつかりのどかに霞んでいることよ。)その風に散る花々の、身にしむ美しさを春のなごりの光景としてめでよう。

(二折 裏 四) 散花のほひを春のなごりにて

四〇 たち別れ行く雁の一声 貞興

【式目】春(雁) 雁春二秋一(動物・一座二句物)

【作者】貞興

【語釈】●たち別れ行く 飛び立ち別れて行く。「なびくいなばの峯のしら雲／むれるつる田のもの雁の立わかれ」(小鴨千句第七百韻・三四／三五・忍誓／専順)。●雁 ここは春の帰雁。「小夜ふかく月はかすみて久方の雲井に遠き雁の一声」(心敬集・深夜帰雁・一一七)。「過るぞ惜しき雁の一声／舟人も棹を忘る、秋の海」(竹林抄・秋・心敬・五二二)。
【付合】「たち別れゆく」は、本来和歌では、「春霞たち別れ行く山みちは花こそぬさとちりまがひけれ」(拾遺集・春・七四・よみ人しらず)のように、霞、雲の引きなびく様を多く詠むが、ここは前句の春の終わりの心を受け、春と別れ、雁の飛び立つ様子とつないだ。花が散り、春が去り行く情景に、また雁が飛び去って行く別れの情景を加え、終わりゆく春のさまを見せる付けとなっている。

【一句立】飛び立ち別れて行く雁の群れから、一声、鳴き声が聞こえる。

【現代語訳】(前句) 散り行く花の美しい様を春のなごりの光景として、春は別れて行き。(飛び去っていく帰雁の群れからは、鳴き声が一声、聞こえてくる。)

(二折 裏 五) たち別れゆく雁の一声

四一 羽をかはす鳥の契もある物を 三位

【式目】恋(契) 鳥(動物)

【作者】三位

【語釈】●羽をかはず鳥 比翼の鳥。比翼の鳥は、元來は、雌雄が常に一体となって飛ぶとされた想像上の鳥。「在天願作比翼鳥 在地願為連理枝」(白氏文集・長恨歌)により、「羽をかはず鳥の契」で、深い契りを結ぶことをいう。

【付合】前句を一羽で飛ぶ雁の姿ととらえ、比翼の鳥と対比させた。心敬の『寛正百首』に「世とかけてならぶ翼を契しや空とぶ鳥のあとのしらくも」(寄鳥恋・八二)という和歌が存し、「長恨歌に、玄宗と楊貴妃のかたらひ侍し、『天に生まれば一の鳥のはねとなり、土に生まれば一の木の枝とならん』と契しも、たゞ空とぶ鳥の跡なしごととなり侍る心をとりに、わが身のうへと契を詠」と自注が付けられている。堅く契った恋もはかなく破れていくさまを、飛び去り消えた鳥の姿にひきつけていく詠み方は、この付合で、雁が飛び去った後の静寂に長恨歌の恋を付ける把握に近く、付合理解の一助となる。

【一句立】比翼の鳥となって、いつも一緒にいようという約束もあるものなのに。

【現代語訳】(飛び立ち別れて行く雁の一声が聞こえる。)比翼の鳥となって、いつも一緒にいようという約束もあるように、簡単には別れるものではないのに、約束もはかなく破られ、寂しく別れて去っていくことよ。

(二折 裏 六) 羽をかはず鳥の契もある物を

四二 思ひをつげんまぼろしもがな 隆蓮

【式目】恋(思ひ)

【作者】隆蓮

【語釈】●まぼろし 幻術士。長恨歌において、「能く精誠を以て魂魄を致く」道士が、貴妃の魂を尋ねに仙山に至るが、その道士をいう。「たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」(源氏物語・桐壺・桐壺院)。

「人に我あはんくすりを尋ねばや／ゆきてとふなるまぼろしもがな」(文安雪千句第十百韻・四五／四六・宗砌／能阿)。
「まぼろしトアラバ、たづね行 玉のありか玉のゆくゑとも 空にかよふ」(連珠合璧集)。「まぼろし 夢幻ハ化なる事也。又幻化のたとへならで、まぼろしもがなといへるハ、使のたよりなどを云と也。」(産衣)。

【付合】長恨歌の本説取の付合。連理の鳥のたとえから、貴妃の魂を探し求める道士を連想した。前句を、思う人との仲が進展しないさまとし、密かにあの人を恋慕うばかりでは、あの方はまったく気づいてくれないので、間をむすぶ道士がいてくれたらと夢想する句を付けた。

【一句立】私の心の思いを告げてくれる道士がいてほしい。

【現代語訳】(前句 羽根を交える鳥のように仲良くと約束する誓いもあるのに。) 私の思いはあの人に伝わらない。この気持ちをあの人に告げる道士がいてほしいことだ。

(二折 裏 七) 思ひをつげんまぼろしもがな

四三 来ぬ人や心づかひにかはるらむ 有実

【式目】恋(来ぬ人)

【作者】有実

【語釈】●来ぬ人 訪ねてこないあの人。「月よにはこぬ人またるかきくもり雨もふらなむわびつつもねむ」(古今・恋・七七五・よみ人しらず)。
●心づかひ 気持ちをこめて思っていること。また、その思い。『夫木抄』では「使」の下位分類に位置する語であり、自分が訪ねることなく、心の思いだけを使者として相手のもとに遣わすといった意味で使用する。口語的で、和歌・連歌には珍しい語。恋人が手紙さえよこさない冷淡な態度になった悲しみを表現したり、また一方では「使い」と掛けるところから、「心づかひ」がしきりに行き来すると、やや俳諧的にも詠む。「人にます心づ

かひもあるものをたよりなくてふことを告ぐらん」(忠見集・一七八)。「おもひやる心づかひはいとなきを夢に見えずときくがあやしき」(好忠集・四四四)。「ゆきてとふなるまほろしもがな／面影も心づかひになるかとよ／おもひやれども思かへさず」(文安月千句第十百韻・四六／四七／四八・能阿／頼重／智蘊)。「いつかは文のたよりきかまし／都には心づかひの行かへり」(宝徳四年千句第二百韻・七八／七九・英阿／忍誓)。

【付合】前句の、自分の気持ちを道士に伝えてもらいたいという願望の意図を、付句で説明している。相手の熱心さの度合が、訪ねることから、ただ思いやることへと弱まってしまったのではという恐れの気持ちを付ける。長恨歌の「まほろし」から「使ひ」を連想して付けた。

【一句立】訪ねてきてくれないあの人は、もはや愛がさめて、私のことを気にするといった程度の冷淡な気持ちになつてしまったのだろうか。

【現代語訳】(前句) 私のこの思いをあの人につげる道士がいてほしいのだ。なぜなら、来てくれないあの人は、私への関心が失せて、私のことを気にかけているといった程度の冷淡な気持ちになつてしまったのだろうかと思うから。

(二折 裏 八) 来ぬ人や心づかひにかはるらむ

四四 なぐさむ月をたれか恨むる 毘親

【式目】恋(恨むる) 月只一、恋一、月松などに一 月與月(可隔七句物) 夜分(月)

【作者】毘親

【語釈】●なぐさむ月 眺めることで心が慰められる月。「うき事もなぐさむ月と思ひしにふけ行く秋は涙なりけり」源承和歌口伝・源時清)。恋人が来ないことは恨みに思つても、心を慰めてくれる月は恨む事はないという気持ちである。毘親の句はまだ冷静だが、来ない人を待つ恋のつらさ、せつなさがさらに高まれば、月を見ても心が静まらない状況の

句となる。即ち、「来ぬ人を待つとはなくて待つ宵のふけゆく空の月もうらめし」（新古今集・恋四・一二八三・藤原有家）や、また心敬歌に「ながめつつさても忘れぬ涙かな誰がなぐさめと月はなるらん」（寛正百首・七一・寄月恋）とある状況であり、心敬歌には「人ゆへの涙は、ながめてもわすれ侍らねば、わが身には月もなぐさめならずとかこち侍る也」と自注がある。「なぐさむ月もながめわびぬる／思ふことむねにうかべばかきくらし」（老耳・一八一〇／一八一）。

●たれかうらむる 誰が恨もうか。和歌にも連歌にも例の乏しい表現。同意の「たれうらむらん」の例は少ないのに対し、この「たれかうらむる」の用例はほとんどない。あるいは散文的な語法として和歌・連歌には敬遠されたか。

【付合】「来ぬ人」から「恨むる」と付けた。月は恨みはしないが、あの人を恨むという心情である。

【一句立】心が慰められるはずの月なのだから、恋しい人が来ないといつて一体誰が恨めしく思おうか。

【現代語訳】（前句 来てくれないつれない人は、もはや愛がさめて、私のことを気にするといった程度の冷淡な気持ちになってしまったのだろうか。） 見れば心が慰められる月だから、恋しい人が訪れてくれないといつて、恨めしく思ったりはしようか（あの子のことは恨めしいけれど）。

（二折 裏 九） なぐさむ月をたれか恨むる

四五 秋の夜の老の寢覚に時雨して 利在

【式目】秋（秋・時雨） 夜（夜分） 時雨（降物） 時雨秋冬各一（新式今案では一座二句物。この百韻では、

初折表第三句に「時雨る」（冬の時雨）がある。） 老只一鳥木などに一（一座二句物。三折表第五九句に「老ぬる声」（うぐひす）がある。） 寢覚に夢（可嫌打越物）

【作者】利在

【語釈】●老 老いた身には、一段と月の美しさが慰めとなる。「かすむ夜をならひときけば老が身のなぐさむ月は春のみや見ん」(宗祇集・春月・二三)。
●老の寢覚 年をとると、暁早くに目がさめること。とりわけ秋の長夜には早い目覚めが意識される。「聞きてこそ思ひしらるれ秋の夜の窓打つ雨の老の寢覚は」(為家集・秋雨・五六〇)。「老の寢覚の秋のよなく／我命長きを歎く袖の露」(熊野千句第九百韻・八四／八五・心敬／道賢)。
●時雨して 「十月には時雨」(連理秘抄)と、本来は冬の初めの景物とされているが、『連珠合璧集』「時雨」の項で「露時雨とつゞけ、又秋の詞を入れては秋になる也」とあるように、秋の詞と共に使用して秋の情景となる。また、「時雨トアラバ、ね覚」(連珠合璧集)。「冬きてはしぐればかりぞおとづるとふ人もなきおいのねざめに」(千五百番歌合・一六七五・丹後)。「千しほになるや涙なるらん／神無月老の寢覚も時雨なり」(菟玖波集・冬・四六八・後宇多院御製)。
【付合】前句の「月」に「時雨」を付け、時雨により月が見えないと説明した。「時雨トアラバ、月を待」(連珠合璧集)。前句は、見えないからといって恨むことはないという意になる。

【一句立】長い秋の夜、年をとったゆえにはやく目覚めたが、時雨が降っていて月も見えなくて。

【現代語訳】(前句 老いの慰めになるはずの月だから、誰が恨むことがあるうか。) 秋の長い夜、年寄りの早い寢覚めに月を見ようとした時に時雨が降っていて、月の姿も見えなくても。

(二折 裏 十) 秋の夜の老の寢覚に時雨して

四六 命の露のいつかこぼれん 心敬

【式目】秋(露) 命只一 虫の命などに一 (一座二句物) 露(降物・可隔三句物)

【作者】心敬

【語釈】●命の露 「露の命」に同じく、露のようにはかない命をいう。ここは「こぼれん」とのつながりを明確にす

るため「命の露」と倒置している。ただ、この語句は和歌において用例が非常に少なく、連歌も心敬以後の例がわずかにある程度であり、あえて使用する心敬の創意を見るべきか。「はかなしやあだに命の露消えて野辺にやたれもおくりおかれん」（新続古今集・哀傷・一五八〇・西行）、「とゞまらじたゞさばかりのことの葉にかゝる命の露の玉ゆら」（草根集・久契恋・四三六三）。また、兼載歌「さをしかの命の露ぞ消えやすきともしの影はまだ残る夜に」（閑塵集・照射・九九）があるのは、心敬と兼載のつながりから注目されよう。

【付合】前句の「老」に「命」を付けた。「命とアラバ、露 老」（連珠合璧集）。また、紅葉を色付かせる「時雨」と「露」の縁、さらに前句の「時雨」によりたまった「露」のイメージからも「時雨」に「露」を付けた。「露トアラバ、草 命 雨之類」、「時雨トアラバ、草葉を染る露」（連珠合璧集）。「此秋も時雨の露と消やらで猶さだめなき身をぞうらむる」（草根集・秋時雨・二五七〇・文安四年十月廿七日詠）。「もみぢ分すていづる木の下／雨やどり時雨の露に立ぬれて」（文安四年五月廿九日何船百韻・三六／三七・親当／心敬）。

【一句立】露のようなはかない命は、まるで露がこぼれるように、いつ消えてしまうのであろうか。

【現代語訳】（長い秋の夜、年をとって早く目覚めれば、時雨が降っていて。）思えば、この老いた私の命は、いつ時雨によってたまった露のしずくがこぼれるようにはかなく消えていくのであろうか。

（二折 裏 一一） 命の露のいつかこぼれん

四七 刈^狩りのこす草葉ばかりの陰なれや 伝芳

【式目】 雑 草葉（植物）

【作者】 伝芳

【語釈】 ●刈りのこす 刈り取り残している。「いろになびくは野べの夕ぎり／かりのこす小田の一むらりかけて」（寛

正六年正月十六日何人百韻・三〇／三一・行助／宗祇)。●草葉 草の葉。葬送の場所の比喩ともなった。↓【考察】「露トアラバ、草」(連珠合璧集)。「分けゆかむ草葉の露をかごとにてなほ濡れ衣をかけんとや思ふ」(源氏物語・夕霧・落葉宮)。●ばかり わずかにくだけ。「軒にさす日かげの下はきえはてて草葉ばかりにのこる朝霜」(伏見院御集・霜・一五三七)。

【付合】前句の「露」に「草葉」を付け、露のこぼれる場所を説明した。命が露がこぼれるように消えていくのは、「草葉」の陰であることも同時に示す。

【一句立】刈り残した草の葉が少しだけある陰のあたりなのであろうか。

【現代語訳】(私の命もはかなさという点では露と同じようなもののだが、そんなはない命の露は、いつこぼれ落ちることだろうか。)刈り残した草の葉が少しだけ茂る、その陰に落ちるのだろうか。

【考察】和歌において、比喩的に墓所を表わす言葉は「草の原」「草の陰」と、「草」のある場所である。「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとぞ思ふ」(源氏物語・花宴・朧月夜内侍)、「夢にさへたちもはなれず露きえし草の陰よりかよふ面影」(風雅集・雑下・二〇二五・安嘉門院四条)。このように「草の陰」は、はかなく消えた露の命の行き場所として詠まれている。これに対して「草葉」は「露」のおきどころとして、「秋風になびく草葉の露よりも消えにし人を何にたとへん」(拾遺集・哀傷・一二八六・村上天皇)、「わが思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづしをるらむ」(拾遺集・恋二・七六一・詠み人しらす)のように詠まれ、人をたとえる露の存する場所であるところから、「草の陰」と「草葉の陰」の意味の近似化は必然であった。ただ、歌には「草葉の陰」という表現はまず入らず(『新編国歌大観』、『新編私家集大成』に計三首のみ)、連歌においても管見では一句のみ。ただこの句「草葉の陰をたのみ東路／みぬ国のたまとやならむ身のゆくへ」(応仁二年冬心敬等何木百韻(野坂本)・六二／六三・長牧／心敬)も、『心敬作品集』所収天満宮文庫本では、「草の陰をもたのみ東路／みぬ国の土とやならん身の行急」である。それゆえ、「草葉の陰」で葬送の場を比喩的に表わす和歌、連歌はほぼないと見てよいのであるが、この四七句は明らかに葬送の場を

意味している。「草葉の陰」は狂言『靱猿』に見られるなど会話文で使われた表現で、四七句は、連歌へも会話文体をまぎれこませて使ってしまった形であり、心敬らは黙認したのであろう。

(二折 裏 一二) 刈りのこす草葉ばかりの陰なれや

四八 夏野の原の水のたえだえぐ 立承

【式目】夏(夏野) 水(水辺用)

【作者】立承

【語釈】●夏野の原 夏草の茂った野原。草丈が高く、川は埋もれ隠れてしまう。「しげりあふ夏野の原の忘れ水まれにや月の影やどすらん」(澄覚法親王集・夏野月・八六)。「分わぶる夏野の原の草高み／かよふ鹿子の足ぞ弱かる」(行助句集・四七一／四七二)。●水のたえだえ とぎれとぎれに見える水の流れを言う。「結びすてたる水のたえだえ／冬はまた安積の沼のあさ水」(園塵第一・冬・三九三／三九四)。

【付合】付句の情景を、前句で謎解きをした形の付合。墓所を暗示する前句から、「草の原」を思い、そこからの連想で「夏野の原」としたか。

【一句立】夏草の野原を行く水の流れはとぎれとぎれに見えていて。

【現代語訳】(刈り残した草葉がほんの少し残っている、その陰に隠れてしまっているであろうか。)夏草の野原を流れる水の流れはとぎれとぎれに見えている。

(二折 裏 一三) 夏野の原の水のたえだえたぐ

四九 暑き日は汗も袖をやつたふらん 忠英

【式目】夏(暑き・汗) 袖(衣類)

【作者】忠英

【語釈】●汗 「汗」は古典的な歌語ではなく、「わぎもこが汗にそほつるねより髪夏のひるまはうとしとや思ふ」(好忠集・六月中・一六六)のような俳諧的な歌に見られ、また連歌においてもこの語の使用は多くはなく、やはり俳諧的である。ただ、心敬自身の句にもあり、心敬の周辺では詠まれていたようで、この句も心敬は許容したのであろう。「大和路や解文をしのぶ瓜の夫はつをのみひきてあせぞながるる」(拾玉集・夏・二三二八)。「箱根山はしりくれば湯もと□(にて)／身にあせながしいそぐ旅人」(小鴨千句第四百韻・六三／六四・□(宗砌)／□(心恵))。「登る峠に汗を干す人／夏衣うすあの山路越えやらで」(竹林抄・夏・二九八・心敬)。「ながる、あせのむつかしの身や／此暮の蚊聲みちて風もなし」(行動句集・八二四)●つたふ 水滴は、「たえだえ」「つたふ」と和歌に形容される場合が見られ、ここはその表現の流れをくみ、かつ伝統的な表現をくずしている。「あやめつたふ軒のしづくもたえだえにはれまにむかふさみだれの空」(風雅集・夏・三四七・院冷泉)。「かすむばかりの露のふるみち／たえだえに岩もる水やつたふらん」(河越千句第七百韻・四二／四三・印孝／長敏)。「連珠合璧集」に「あせトアラバ、つたふ」とあるように、「つたふ」から連想されるのは「あせ(畦)」であるが、それを汗に転用したか。「わづらはで月にはよるもかよひけりとなりへつたふあぜのほそみち」(山家集・雑・題しらず・九八〇)。

【付合】「たえだえ」「つたふ」流れを「汗」の流れと見た。

【一句立】暑い日には、畦伝いならぬ、汗も袖を伝ってながれるのだろうか。

【現代語訳】(夏草の野原を行く水の流れがときれときれに見える。)暑い日には、汗の流れも袖を伝って流れてい

るだろうか。

(二折裏 一四) 暑き日は汗も袖をやつたふらん

五〇 やすきかたなきそはのかけはし 貞興

【式目】雑 懸け橋 (山類・用)

【作者】貞興

【語釈】●やすきかたなき たやすく進む手段がない。「方」は方法、手段。●そは(岨) 山の急斜面、がけになっている所。読みは「Soua (ソワ)。(日葡辞書)。また「Souano cagegiuo tquai yuqu (岨の碇路を伝ひ行く) 絶壁に沿って険しい所や道を通って行く。」(日葡辞書)。●梯 けわしいがけ沿いに通行するために、板を棚状にさしかけて造った道。「古畑つくる木曾の山里／五月雨に岨の梯朽ちそひぬ」(熊野千句第四百韻・八八／八九・鶴丸／宗怡)。「朽ちてあやうき岨の梯／旅人も駒引きかへす深山路に(心敬)」(連歌百句付)。「そわトアラバ、かけ路かけはし はた たつ木」(連珠合璧集)。

【付合】「たえだえ」という語句を、「つたふ」を媒介に、水の流れる様子から、汗の腕を伝う様子、見えたり見えなくなったりする梯を伝って行く様子と連想して使った。「跡とほきそはのかけ路たえだえに霞をつたふ春のやま入」(玉葉集・雑一・入道前太政大臣の家にて山路霞といふ事を読み侍りける・一八四八・三善康衡)。「たえだえトアラバ、かけはし」(連珠合璧集)。前句の「汗」を、断崖を進んでいく恐怖・緊張ゆえの冷や汗ととる。

【一句立】たやすく進む手段がない、けわしい斜面の梯。

【現代語訳】(前句 暑い日には、緊張の余りの冷や汗までも袖をつたっているのだろうか。) 簡単に進んでいけるような手立てがない、けわしい斜面の梯を通れば。

【引用文献拠一覽】

式目の引用は京大本『連歌初学抄』（『京都大学藏貴重連歌資料集1』（平成一三・臨川書店）による。

『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合には、木藤才藏『連歌新式の研究』（平成一一・三弥井書店）所収太宰府天満宮文庫本によった。

【語釈】等における和歌・漢詩句の引用は断らない限り『新編国歌大観』による。『草根集』は日次本（『私家集大成五』（昭和四九・明治書院）所収書陵部藏御所本）を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観第八卷』所収の類題本（ノートルダム清心女子大本）の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺本の番号によった。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

連珠合璧集：『中世の文学連歌論集一』（昭和六〇・三弥井書店）

連歌寄合：『連歌寄合集と研究（上）』（昭和五三・未刊国文資料刊行会）所収祐徳稲荷神社藏中川文庫本

産衣：『連歌法式綱要』（一九三六・岩波書店）

菟玖波集：金子金治郎『菟玖波集の研究』（昭和六〇・風間書房）

竹林抄：新日本古典文学大系『竹林抄』（一九九一・岩波書店）所収巖島神社宮司野坂元良氏藏本

文安雪千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収静嘉堂文庫藏本

顕証院会千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収内閣文庫藏本

宝徳四年千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）城崎温泉寺藏本

小鴨千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）小松天満宮本

熊野千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本

河越千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収内閣文庫藏本

伊庭千句：古典文庫『千句連歌集七』（昭和六〇）所収松井明之氏藏本

寛正四年六月廿三日唐何百韻：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収太田武夫氏本

文安四年五月廿九日何船百韻：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収高野山大学附属図書館本

寛正六年正月十六日何人百韻：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収天満宮文庫本

宗御句集：貴重古典籍叢刊十一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収大阪天満宮文庫本

行動句集：貴重古典籍叢刊十一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収大阪天満宮藏本

吾妻辺云捨：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収天理図書館本

心玉集・心玉集拾遺：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収靜嘉堂文庫本

連歌百句付：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収天理図書館本

新古今集聞書（東常縁原撰本）：『新古今集古注集成 中世古注編1』（一九九七・笠間書院）所収黒田家旧藏本

新古今拔書抄：『新古今集古注集成 中世古注編1』（一九九七・笠間書院）所収松平文庫本

日葡辞書：『邦訳日葡辞書』（一九八〇・岩波書店）

老耳：古典文庫『老耳（宗長第三句集）』（昭和五一）所収天理図書館綿屋文庫本

白氏文集：『新釈漢文大系』（平成二一・明治書院）